
子連れステュワードの縁由

ことわりめぐむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子連れステュワードの縁由

【Nコード】

N3851W

【作者名】

ことわりめぐむ

【あらすじ】

事故で母を、病気で父を失い、生活環境まで変わらざるをえなかった事から困ってるだろうと、王子に思い込まれたローレンは、本人の意思は尊重されずに屋敷の執事として雇用される。華やかでない業務を大した問題もなくこなすそんなある日、夜間見回りの際に幼い少女を見つけ、保護者になる羽目に。なぜ彼女はそこにいたのか、そして命を狙われるのか…。

そんな事よりも、今回は展開上ファンタジー要素がちゃんと書けるのか。ジャンルが怪しいお話です。『北のまちに降る雪』の続編

となりますが、先の内容を知らなくても問題は無いです。

1（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体・事件とは一切関係ありません。

作中にメインで出てくる国名と人物は全く架空のものであり、実在はしていません。作品の世界観上、一部実在する国や文化を引用していますが、話の内容は完全なフィクションです。

因みに「北のまちに降る雪」の数年後の設定となっておりますが、前作品を読まなくても問題なく読んで頂けると思います。

庭の片隅では、とても小さな女の子が座り込んでいた。

賊や敵国の間者かとビクビクしながら向かってきたため、口元に笑みが浮かぶ。男がそんな弱気でどうするのだと屋敷の主には馬鹿にされるかも知れないが、仕方がない、彼には戦うすべがないのだから。

幼女の年齢の違いはローレンにはよく分からなかったが、おそらく五歳から七歳程度と推定する。彼女は、とても長い金色の髪で隠れてはいたが、衣服を何も身に着けていなかった。

幼いのだから恥ずかしいとは感じていないかもしれないが、歳はかなり離れているとはいえ、ローレンとダヴィード、二人の男の目前に全裸のままでは彼女が可哀そうだと考え、上着を彼女にかける彼のフロックコートでは丈が長すぎるため、上着のせいで歩行困難になるだろうと考たローレンは彼女を抱き上げた。

その間、少女は抵抗もせず、何も語らずこちらを見つめていた。

「どうした、僕の顔に何かついてるか」

ローレンの顔をずっと見つめていた彼女の視線があまり嬉しくなくて尋ねると、かわいらしく小首をかしげる。

「もしかして、ぼっちゃんの隠し子だったりして、『パパ』とか思ってるんじゃないの」

冷かすように舌を出してダヴィードが言つと、彼女は気がついたかのように「パパア」と言って抱きついてきた。

「な　なんでだ!!」

「ぱぱあ?」

言葉にはしていたが、予想に反した言葉に、ダヴィードが驚きの声を漏らす。

「違う、違う。断じて違う」

そんな彼の視線に否定をするが、何の説得力も無い。無邪気な子

供が「パパ」と言つて抱きついてゐるのだ。どこのだれが見ても、若い父親と娘として見えるのだろう。

「パパア。この娘どうしますの？」

「だから、違つて 髪の色も眼の色も全然違つたろう」

「いまだき、父親に似ない娘なんて、山ほどいるさ」

異民族同士姻族関係を結んでも咎められなくなった今の世の中、父親の因子よりも母親の因子が強ければ父と子が全く似ていないケースも珍しくない。

「大体、こんな大きな子供を作ろうと思つたら」

「分かつてるつて、お子様に子供は作れないない」

必死で親子でない事を証明しようと論説するローレンの言葉をさえぎるように、ダヴィードが軽く言葉を返すと二人は屋敷への歩みを速めた。

できるだけ人目につかないようにこそそと屋敷の女主人の部屋に向かう。目的は女主人ではなくて、その侍女のヴェーラである。

「ぱぱあ？」

幼子の発言を確認して、繰り返した彼女の第一声は、予想を裏切らず、想像してた通りの反応に顔をしかめたローレンだったが、説明するのだけは省略しない。

「先ほど庭をダヴィードと散歩していたら、この子が居たんだ。なぜか僕を父親と勘違いしてる」

「はあ」

あきれたようにヴェーラは言葉をもらす。その反応も予測済みだし、いちいち反応するつもりはないので、自分の用件を伝える。

「とりあえず、こんなカツコじゃ可哀そうだから、洋服を用意してもらえないだろうか」

「えっヤダ。この裸じゃない。なんかしたの」

「知らん」

コートを脱がそうとして、手を止めたヴェーラが怒気の籠った声でこちらを見るが、正直な話「何も知らない」のだから正直にそう

答えた。

「ぱぱーあ」

彼女たちが部屋の中に入ってしばらく待つと、洋服を着せられた幼女とヴェーラが出てきた。白を基調とした赤い小花模様のドレスに身を包んだ姿が愛らしい。長い金色の髪が走るたび流れるように揺れてベールの要に広がるのが、よくドレスに合っていた。

髪はほんの少し湿り気を帯びて、頬は少し赤みがさしている事から、湯を使って汚れを落としたのだらうと推測する。顔色が良いのも可愛らしさを際立たせていたに違いない。

「ヴェーラ。君はかなりセンスが良いんだな」

パパと言つて抱きしめられている事実よりも、短時間で愛らしいレディに仕上げた感性に、素直に敬服する。

「そんな事よりも『パパ』はどうするつもりなのよ」

「とりあえず、『パパア』ではなんともできないし、ヴィオロン様に報告だな」

ローレンは彼女に抱きしめられていると、なんとも言えない安堵感が体をじわじわと染めていくのを自覚していた。本当に知らない存在に「パパ」と呼ばれている事実や、彼女の所在をどうするかを悩んでいたことよりも、なぜか守らなければいけない想いに駆られている。

そんな『パパ』とは違い、傍で見ている二人はこの幼子の存在をどう扱うかローレンに尋ねるが、不幸な結末にならないように頭を悩ませていた。身元もはつきりしない者をこの屋敷は受け入れるだろうか。答えは恐らく、否であるなど、ダヴィードは直ぐに結論を出したため、直接の上司に判断を仰ごうと思ったのである。

「そうだな」

幼子を抱き抱えたままローレンは立ち上がると、屋敷の執事が休む部屋に向かう。勿論、ヴェーラには軽く礼は済ませた。

「どうなったのか、明日、教えなさいよ」と彼女は扉を閉める前にこつそりと言っていたが、明日のモーニング・ティーの時間に結論

は出るだろうかあやしい時刻である。

隠し子に間違われるのは些か否めないとして、誘拐してきたと勘違いされないように話を進めるのは、どうしたらいいのだろうかと悩みだすと、足が次第に重くなっていくのが不思議だった。

結論は先伸ばしでもかまわないから、相手が眠っていて欲しいと願いながら、部屋の扉をノックした。

彼が彼女と出会い、保護者となる話を続けるためには、まず彼がこの国の第三王子の住む屋敷の執事になった辺りから話をはじめなければならぬ。

その日は比較的なにもない普通の日であった。いつもと違うのは、前日より風が強く、作業に手間がかかっていた事だろうか。一日の業務が思った以上に手間取ると、必然的にその後の行程も遅れることとなる。遅い夕餉を取ろうと家のものが食卓を囲む。時間のずれは生じていたが、いつもの行程、食事、就寝を行えば明日またリセットされ、いつもと同じ時間、同じ作業行程の中、生活業務を行う。小作人の選択肢といえば、畑に出かけるか、羊を山へ連れていくかの違いだけだ。

今日一日が無事に終わったことを神に感謝するため、主人が長い感謝の言葉を語り終えたそのときに、家の扉が強く叩かれた。

居候であっても、衣食住は与えられ家族と同様に食事を許されるが、このような場合応対に出るのは、夫人ではなく一番下の息子でもなく、居候であるローレンだった。

食欲は当然あったが、表情には出さず暗黙のルールとなっている応対作業に向かう。ゆっくり扉を開けるとそこにはこの国の第三王子の姿があった。

目が合った瞬間、扉を力の限り閉ざす。大きな扉の音に、家人が驚いたまなざしをこちらに向けるが、そんな事は気にしていられない。

「御挨拶だな、ローレン。久々に会ったというのに、なんだその態度は――！」

目が合ったと感じたのは、ローレンだけではなく相手もそうだったらしい、視界を閉ざした相手がローレンだと認識して相手は怒鳴る。

「私は貴方様など知りません。どなたかとお間違いではないでしょうか」

絶対家に入れてはいけなと体全体が抵抗していた。

外から聞こえる声は知らない人間に対して発せられるセリフではないことは、誰の目から見ても分かる。加えて入り口をドンドン叩く音に、家人は尋ねずにはいらなかった。

「ローレン。誰なのだ」

「どなたなのか、存じ上げません」

「ローレン！！」

扉を叩く音は、今にも壊しそうな勢いで、相手の声は恥ずかしいぐらいに大きくなっていった。

「お早めにご退去を」

知らない知らないと言いながらも言葉遣いは隠せなくて、おそろく知り合いでローレンが気を使う相手だという事は予測されたが、このまま放置しておくわけにも行かなくて、近所迷惑な客人に家人が声をかける。

「失礼ですが、ローレンは知らないと申しております。どなたかは知りませんが、お帰り願えませんか」

「私を知らないと言いつ張るのだな、分かった。教えてやろう、私の名は、ソロヴィヨフ・ヴラディーミル・カールエヴィチ。それでも知らぬと言っのだな」

ヴラディーミルの名乗りに家人が青ざめたのは言うまでもない。

「なぜここに？」

おびえる家人のまなざしを背中に感じローレンは家を出た。

王子の名前など知らなくても生きていける田舎で、王家の鷹の名前まで名乗るのは嫌がらせなのか、その名前の意味を知らない天然なのか、何の問題も意識していない表情で王子はローレンに続く。

この家人たちの場合、ローレンの父セーヴァが軍の兵器開発主任なんぞに抜擢されている時点で、この国のお偉いさんの名前は耳にこびりついていることだろう。

セーヴァが死んだ今となつては、過去の悪夢として　。

「いや、私としてはお前が恋しくてな」

どこまで本気なんだろうと、ローレンは顔を歪めた。空腹のせいか、久しぶりの王子の嫌がらせに体が本気で拒絶しているのか、第三者の立場から見ても表情は王子に向けられるものではない。

「僕はもうシャムでも何でもなし」

「だからだよ」

「は？」

「両親もいない、地位も後ろだてもいない　　そんなお前が心配だな」

ローレンの父は、この国を戦争大国とさせてしまった技術を提供した科学者である。（正しくは、ローレンの父だけの知識ではなかったが）

王は褒美としてこの国の貴族より高い身分を科学者に与えた。アレキサンドリナという街に大きい屋敷を与え、街から外に出ないように縛り付けた。一人息子も同時に住居を与えたのは、科学者への人質。少年から青年になる初期の息子には拒絶できる意志もない。

貴族以上の身分があったのは過去のこと、現在は父が病死し、地位は返上しているため、ローレンはただの平民へと成り下がってい

る。母方の親戚の山村で居候として日々暮らしていた。

望まぬとも併合された国、巻き込まれた国民、足りなくなった兵力を補充するために連行された農民、自国民であつたとしても戦争というモノには憎しみを持つ人間が多い。ローレンがセーヴァの息子というだけで、他者の見る目は『人道に反する罪を犯したもの』として軽蔑していた者が多く、父方の親戚は勿論、過去に住んでいた村の人でさえローレンを拒絶した。彼の素性をよく知らない母方の親戚の親切に身を隠すように入り込んだのも事実である。

「本来の 用件は？」

心配だから、会いに来た そんな人ではないとローレンは知っている。腐つても王子様なのだから、自分でここまで来る必要はないだろう。わざわざ、住居を探し出してまで訪ねてくるのは、他者には言えない何か他の用事があるのだと、感じたのだが。

「とりあえず、私の執事になれ」

「いやです」

内容は大したことがなく、考える間もなく拒絶する。

「なぜ即答なのだ！！」選ぶ権利もないだろうとばかりにグラディ―ミルは詰め寄る。

「別に、殿下に心配してもらわなくても、今の生活には困っていませんが」

嘘だつた。

昔から住んでいた村では、父が科学者になつて貴族階級に召し上げられたということは、皆が知っている。ポーランの兵器開発にかかわっていたというのは、よく知っていることである。母方の親戚も父方の親戚も、よく思わない人間が多い。親戚に疎まれながらも、生きていくには独立は不可能であつた。

飼っていた羊も鶏も居ない上、住む家も無い、自給自足の方法は分かつていても、明日飢えをしのぐ方法がない。アレキサンドリナから追い出された時に、こうなることは予測できたが、元に戻る選択肢をワザと選んだ。

父が残した財は多少あったが、ローレンはそれをすべて退職金がわりに屋敷の使用人に分け与えた。それは父が残した功績による報酬で生きていくのはローレン自身が反吐のでる行為である拒絶と、今まで世話をしてくれた使用人に対しての礼と是から無職になる謝礼でもあった。

「では、それとも何か、私のことをデーマと呼んでくれるのか？」
デーマと愛称で呼ぶか、執事になるかを天秤にかけさせる。ローレンは立場、愛称で呼ぶのだけは嫌だったので、たいていの要求には首を縦に振っていた。

それは過去の話である。

「嫌ですよ。デーマ様」

とてもきれいな笑顔で一言。

自分の要求が思ってもみない方向に通ってしまったので、ヴラデイーミルは拍子抜けしてしまう。「なぜそちらを選ぶ」と固まってしまった。嬉しさのあまり顔が赤いのはローレンの気のせいではない。

「満足されましたか、ではお引き取りください」

固まったままの王子に一礼をし、そのまま背を向ける。

静かに家の中へ帰っていく友人にヴラデイーミルは声をかけられず、ただ見ているだけしか出来なかった。

「王子は、何の用だったのだ」

なんでもなかったかのように、ゆっくり帰ってきたローレンを捕まえて、家人がローレンに質問する。その勢いは質問と言うより、尋問に近かった。

青ざめた表情は変わっていない。

「僕を召抱えろと」

「は？」

ローレンの拒絶の態度と、直々に王族がこんな家にやって来た事で、とても悪い結果を想像していた家人は驚きのあまり、声を漏らした。

家人が思考を整理するのを少し待ってからローレンは結論を伝える。

「勿論お断りしておきましたが」

「な、なんだって」

「何か問題でも」

「大有りだろ。今からでも遅くない、お受けして来い」

そして、ローレンは今夜の晩餐にはありつけず、実質、家を追い出されることになった。

当たり前前の反応だな　とは、いまさらながらに思う。

王子の顔が知られていない偏狭の地であつたとしても、戦争好きの王の噂は皆知っている。最近でこそ、直接的には戦争を仕掛けることはなくなつたが、いつなんどき気が変わるか分からない。その、息子が所望しているものを断つたとならば何をされるか怯えて暮らさねばならない。

実際は、ヴラディーミルは父王とはかなり仲が悪いので、そのような結果にはならないことはローレンは知っているが、王族の内部事情など知らない農民には、王の機嫌を損ねないための当たり前の行動だといえる。しかも、ただの親戚、ただの居候。自分の家族の平和と、厄介ごとの面倒まで見る必要があるのかを天秤にかければ、必然的にローレンを王族に差し出すことになる。

「殿下」

つい先ほど固まつた場所で、同じように固まつたままの王子に声をかける。

王位継承権は三番目とはいえ、この国の王子様である。このような場所で放置されたまま、誰も回収に来ないのは計算外だった。

せめて、ここに居なければ「お帰りになられていました」とでも言えたのだから、ローレンにとって、真に残念な結果である。

「先ほどの話。仕方がありませんので、お受けいたします」

ため息を吐き出して言う言葉に、固まつた王子の時間が動き出した。

「そうか」

満面の笑みで手を握り締め、上下に振り回す。

ローレンは嫌々ながらも、久しぶりの王子の子供のような行動に、変わっていないかと安心感を感じていた。依頼を受け入れた事を、心の底から喜んでいるのが見て取れるからである。

彼が最後にヴラデーミル王子を見たのは、王子とその妃の結婚式のパレードの日で、文字通り見た日である。

いつもどおりゆっくり降る雪の中。いつもと違うのは街中がその珍しい出来ごとで、皆興奮していた。普段静かな街が珍しく沸いていて、多少見物場所は違うものの貴族も商人も関係無しで、街路に並んで華やかな催しを見届けようとしていた。市民達の熱気で驚いていたが、自分もふらふらと街頭に歩みを進めたのは、二人を祝福しようと思ってではなくて、その催しに興味を引かれていたためだ。王位継承権は勿論ない王子が、他国から妃を迎えるのはそんなに珍しいことではない、ただ王族の結婚お披露目目的パレードを行うのは始めてで、外国かぶれの王子がどこかの国の王族を真似て大々的な結婚式を市民の前で行いたいと望んだのだろう。

王都ではなく、別荘地として作られたアレキサンドリナで行ったのはなぜかという話題が、新聞のしばらくのネタであった。

街道に並ぶたくさんの人たちの中に混じることはせず、一步後ろで時計店の壁に寄りかかっていると、遠くから王子たちが乗っていると思われる馬車が近づいてくるのが目に入る。盛装された姿は華やかで、このポーランで現実のものではないような雰囲気が出た。

冷やかし半分で見に来ていたローレンも、馬車の上で手を振る二人に釘着けにされていた。

ローレンが現実的ではないと感じたのは、王子の隣に座る女性のせいであつたのかもしれない。嫁いできた隣国のコウクナの姫は亡くなった姉姫に瓜二つで、姉妹なのだから当たり前なのだが、まるで彼女が王子の妃になったのかと思う。王子は、亡くなった王女に

恋心を抱ていた。その恋心を知っていたローレンは、亡くなった彼女のかわりに妹を選んだのかと少し疑う。

そんな事をぼんやり考えていると、王子がローレンに気がつき、こちらの方だけを向いて大振りに手を振り始めた。今までの華やかで高貴なイメージが一瞬で台無しである。周りの貴婦人からも小さく笑い声が聞こえる。こんな、子供みたいな人にそんな深い想いがあるはずないと一瞬の思想を振り払った。

王子は通り過ぎても振り返ってこちらに向かって手を振っていた。花びらや、紙ふぶきではなく、いつものように降る雪が、二人を祝福していた。

その日は、ローレンがアレキサンドリナを最後にした日でもある。

ヴラディーマルの屋敷はローレンの集落からさほど離れていない領土内にあった。

まるで、この場所に滞在しているのを確認してから、建物を建てたとは思えないなと　ため息をついた。

切り出した石を積み上げたものから、生えているように突き出た鉄の門を潜り抜け、歩みを進める。この位置からは屋敷自体が見えないため、どれだけ大きな庭なのかと思う。

王族が住む屋敷なのだから、大きいのは当たり前なのかもしれないが、以前ヴラディーマルが与えられていた屋敷は、街の中にあつたためか、そんなに大きいとは思えなかった。

「アレキサンドリナに戻るのかと思っていました」

ここより、もう少し南の都会を思い出して、嫌な顔をする。ヴラディーマルも何か思うところがあつたようで、同じように表情は歪んでいた。

「あの屋敷はな、七番目の弟に取られた。王都は嫌なのだそうだ」
「いつ？」

「私が結婚してすぐ　だったかな。私は妃と共に南部から追い出されたわけだ。コウクナの姫が逃げないようというわけのように思えて仕方ない。」

そして北に戻された。しばらくは王都に居たが、もう少し政治的に動きやすい場所をと兄殿下に相談したら　ここの土地にある廃館を与えてくれた」

「こんなところに、廃館などありましたかね　」

山羊を連れてこの近くまで来たことはあるが、記憶の中に貴族が好むような屋敷は無く、遠く前に建つ建物など記憶の中の映像から、全く思い出さない。

「改修したから、元の形はさっぱり分からんぞ」

そんなローレンの頭を読むように、ヴラデーミルは軽く笑う。

「この土地にはお前が居た。偶然ではなく、兄殿下が更に気を利かせてくれたのだろう。私がお前と仲がいいのは知っていたみたいだしな」

あれは仲がいいと解釈するのだろうか、以前の記憶を思い出す。自分の屋敷で大声を出して自由気ままに入り込み、他者の意見など聞く耳も持たず（王族に意見などほとんど出来なかったが）、何かあったら名前を愛称で呼べと強要する。自分が困る姿を見て喜んでた、俗に言う『嫌がらせ』を受けた映像が頭の中で浮かんで消えていく。

「兄殿下とは」

二人のどちらかだということは分かっていたが、王子が他の兄弟の話をするのははじめてで、どちらの兄を指して居るのか普通に興味がわいた。

「一番王座に近い方、ソロヴィヨフ・イジャスラフ・カールルエヴィチ第一王子だ。今は只の軍人だが、将来は良き王になれる方だ。」

第一王子でありながら、あいつに嫌われていたからな。軍人となつた翌日に軍隊の最前線で指揮を取らされておられたから、兵士の苦勞も、相手国の悲劇も目の当たりにされている」

「よく今まで、ご無事で」

「神は、尊い人をお守りくださるのだよ」

「そうですね」

神は誰も見守っていないという言葉を押し殺し、ヴラデーミルに同意した。

ローレンは無神論者ではない、休みの日には教会に行き、食事前には祈りをささげる、困ったときには、あきらめる前に願い事をしてしまう。以前奇妙な出来事に巻き込まれ、神の存在意義を知ってしまったため、心の底で少し反論してしまうのだ。

神様は、見守ってはくださっていないと。

扉の前に王子が立つと入り口の鈴を鳴らす。かなり分厚い扉がゆっくり開かれると玄関ホールが目に入った。

「お帰りなさいませ、坊ちやま」

玄関ホールには、知っている姿が頭を下げ、挨拶をする。

「ヴィオロン」

懐かしい元付き人に嬉しさのあまり、相手の名前を呼んだ。

「お久しぶりです。坊ちやま」

元主人に変わりのない挨拶をする。

ローレンが貴族と同じ身分を過ごしていた頃に屋敷の執事だとはじめから居たのがヴィオロンである。背の高い青年は、ふさわしくない行為を行うと一度は注意をするが主人の意思が変わらない場合は、静かに控え、なんともすこしやすすい相手だったと思い出す。

因みに、田舎の山奥から突然身分の高い存在にさせられたローレンに、服の着せ方、選び方、言葉遣いなど貴族社会で生きていくための礼儀作法や知識を教え込んだのもヴィオロンである。

「元気だったのだな」

変わらないその姿に、自然に笑顔がこぼれるが、気がついた。

「ヴィオロンは何故捕まった」

「いくあてを探していましたら、普通に捕まりました」

「気の毒に」

屋敷の主人の悪口となる悲劇を堂々と語り合う二人に嫌な顔をせずブラディーミルが笑顔で割り込んでくる。

「因みに餌は、お前だローレン」

「ヴィオロン？」

「なんででしょう」

元主人の不快な表情を気にせず、丁寧に聞き返す。

「なんなのだ、それは」

「言葉どおりですよ。ヴラディール様が坊ちやまに会わせてくださると言われ、こんな土地まで連れて来られたのです」

「こんな土地って、アレキサンドリナよりはいい場所だと思うが」

「そうでしたか、大変失礼いたしました」

「ヴィオロンがいれば、私が執事になどなくても構わないですよ」

執事経験がローレンの屋敷に居た期間は少なくともある男性が屋敷に居る。経験が全くない自分を必要とする意味が分からないとヴラディールミルに質問すると、屋敷の主は気だるそうに答えた。

「そういうわけでもないのだ」

「？」

ローレンは言葉の意味が理解できなくて一瞬不思議そうに眉根を寄せる。

「ローレン様、私は、ヴラディール様にお仕える気はありません」

ローレンの疑問を解決する言葉を伝えたと、ヴィオロンは小さく笑う。

「って事を言うのだよ」

その言葉は聞き飽きたと顔に書いてある。あきらめの悪い王子様はヴィオロンを何度も説得し、何度も同じ回答を受けていた。何度も繰り返される勧誘の説得に、嫌な顔ひとつしないで、やんわりと笑顔を絶やさずに答えを伝える。双方とも、普通の人間ならば諦めるか怒るかしている状況を、ただ、変化無しに繰り返し、いまだにあきらめていない。

執事になることも、執事になることも。

「ではなぜここにいます？」

ローレンの疑問はもつともである、仕える気が無いのであれば屋敷にいるのはおかしい。

「ヴィオロンは霧の国からあいつがワザワザ連れて来た、有能な執

事なのだよ。ステュワードとバトラーの両方を難なくこなし、その指示も的確だと言う。フットマンが数名いれば、ヴァレットの仕事も任せられる。さらに家庭教師も併任できる素晴らしい男だ。妻も居ないから住み込みもさせられる」

ローレンは王子の言葉に眉をひそめた。唯一家庭教師という言葉だけが理解できるが、後は何を言っているのか分からない単語がヴラディーミルの口から出てくる。

「そんな、有能な男が昔から私の屋敷で仕えるのは嫌だというのだ」
「仕える主人は自分で選べるのが、この使用人職の良いところです」
子供のようにほおを膨らませ不満をローレンにぶつけるヴラディーミルとは対照的に、静かな表情でこっそり漏らす言葉にローレンは驚いた。

「そんなおまえが、よく僕の屋敷に居てくれたな」

「私の選んだ主人はローレン坊ちゃまです」

「そう繰り返すのでな、ローレンを我が屋敷に連れてこれば、ヴィオロンが付いてくるだろうと話をすると、かまわんと言ったのだ」

「ヴィオロン。長い間会わないうちに、性格が変わっていないか」

「全くの気のせいです」

屋敷のしかも執事となると、現状の薄汚れた姿で屋敷を歩くのは問題だと、ローレンはヴィオロンに浴室へ連れてこられた。ヴラディーミルも当然のようについてくると言っていたが、客人の行動に付き添うのは無礼ですよ』とヴィオロンに窘められた。

今は、ローレンもヴィオロンも客人扱いなのだと認識をする。ただ、客人が主人を窘めるのが普通なのかは疑問であったが。

「ヴィオロンは、何故、僕の屋敷に居たんだけ？ヴラディーミル様が嫌だというのはよく分かるが、他の貴族の屋敷でも欲しがっただろう」

タブを隠すように引いてあるカーテン越しにヴィオロンの存在が

確認できるため聞いてみる。

「当たり前のことですが、この国の方はこの国の礼儀を執事に求める。私は祖国では有能とされていても、こちらの礼儀は全く知らない。相手への敬称の使い方でさえ知らないのです。私達は7名国から連れてこられました。皆、礼儀をわきまえない使用人だとレツテルを貼られてしまいました」

連れて来られたという個所に引っかけを感じたが、その疑問より相手への敬称への対応に思い当たる過去があるため、そちらを質問する。

「確かに、ヴラディーミル・カールエヴィチ様と殿下の事を呼ばないな」

ここポーランドでは、親しくないものの名前を呼ぶ時や、敬意を払う際に、対象の初めの名前と父の名前を合わせて言う。父の名は家と立場を表しているため、名前より重要視されていた。貴族でなかったとしても、本人の初めの名前のみで相手を呼ぶことは、無礼な行為に当たる。

「我が国では、自分より上の方をそのように呼ばないですよ。ロレン様は貴族ではないから、咎められる事もないだろうと 貴方の屋敷に逃げ込んだのです。何も知らない貴方には、実は私の国の礼儀作法はお教えできましたが、こちらでの正しい作法は、勉強しながら実行しておりましたので、とてもバランスの悪いものになっていったかと」

「知らなかったな、そんなそぶりは全く無かったし。何でも出来る完璧な執事だと思っていた」

ヴィオロンと会話を続けながら腕を動かし、湯が体の汚れを洗い落とした事を目視すると、髪に含まれた水分を搾り落とす。カーテンを引くと立っていたヴィオロンが恥ずかしそうに答えるのが目に入った。

「私にもプライドがありますので」

「屋敷にいるときも、そういつてくれればよかったのに。頭の固い

男だとばかり」

どこへ行くにも傍にいて、何かにつけ世話をやいてもらっていたが会話はあまり弾まなかった事を思い出す。メイド達も恐ろしい存在として、一線を引いていた。

「バトラーは自分の感情を表に出してはいけなくなっています。屋敷の主である坊ちやまにこんな話は出来ませんよ。今だからそのお話です」

汚れを落とした後はクロークに連れて行かれる。

「執事用のクロークがあるのか」

「このお屋敷の規模ですと、上位使用人には色んなものが頂けるみたいです」

さてさてとヴィオロンがローレンに見繕ったのはフロックコート。ヴィオロンは黒のフロックコート。ローレンは灰色のフロックコート。上着の丈の長いスーツである。

「個人の趣味に文句は言わないが、フロックコートであれば、ドレスグローブは灰色ではないのか」

ヴィオロンの黒の袖口から出ている真っ白の手袋を指さしてローレンは言う。

「執事は基本　私服です。かといってだらしない服装では、問題があると思われませんか」

優しく問いかけるヴィオロンの言葉に素直にうなずくローレン。その態度に満足そうに微笑むとヴィオロンは続ける。

「結果的に正装に近い服装になってしまします。主人も正装、使用人も正装。知らない方が見ればどちらが主人か迷うでしょう。ですので、執事はワザと『外す』のですよ」

「外す」

「ローレン様は『外す』のはお嫌いでしたし、ワザと『外す』事が出来るように、灰色のフロックコートをお選びしたのですよ。これならば、洋服に合わせなければならぬ灰色のドレスグローブはかえって嫌味ですので、抵抗なく『白』または『黒』が合わせられる

でしょう」

「相手には、タキシードと組み合わせを間違えていると認識されるのだな」

露骨に嫌な顔をして話を聞いている。

「使用人は、仕方のないことなのですよ」

渡された黒の手袋に違和感を感じる、作法が合っていないからではなく、右と左の生地に分厚さが違うように感じられた。指を通すと厚さの違いは気のせいではないことがよく分かった。

ローレンが左手のドレスグローブに指を通した状態で停止しているのに気がついて、ヴィオロンは「特注というわけではありませんが、右より左の方が厚くて強い生地になっています。利き腕とは逆の方が酷使しますから、ワザと丈夫に作ってあります」と語った。

どのように酷使するのかは想像がつかなかったが、これから覚えていけば良いと説明を求めるのはやめて、五本の指を奥まで押し込み、隙間を埋めた。

「イジャスラーフ様のバトラーは年季の入ったジェントルマンですよ。元々、イジャラスラーフ様は軍服ですから、『外す』必要はないと思うのですが、ワザと古い組み合わせをスマートに着こなされています。年齢も私どもとは違い、大分高齢の方ですから、それも違和感がないのですね」

「古いスタイルも『外し』で問題ないのだな」

ローレンの問いにヴィオロンは「そうですね」と答えた。

「やっと来たか」

汚れた小作人から、ジェントルマンに様相を変えたローレンはヴラディーミルの待つ部屋へと案内された。

部屋にはウラディーミルが座席に着き、壁際に背の高い顔の整った青年たちが整列している。

ヴィオロンの後ろに並び、屋敷の主の前まで来ると頭を下げる。

「やはりお前には、スーツ姿が似合っているな」

「久しぶりすぎて、窮屈ですね」

『外し』した手袋を隠したくて両手を後ろに回す。そのしぐさに
ヴィオロンは気がつき「すぐになれますよ」と言った。

「今日からお前を私の屋敷の執事へと任えることを許す。私と大切なものを守ってくれ」

「殿下」

望んで執事となるわけではないのだが、形式的な言葉とそうでない後半の言葉に少し胸が熱くなった。この言葉にて、ローレンはこの屋敷の執事となった。

ローレンがヴラデーミルの言葉に、胸を熱くしたことを後悔するのは、もう少し先の話である。

「でなんで、僕が責任者なのだ」

何の責任者なのかは分からないが、役職『責任者』が不服そうな声を漏らす。

「私はローレン様にお仕えしているという前提でこの屋敷に配置されています。使用人の責任者としてローレン様がお仕事をしているお手伝いをするわけですよ」

なにもおかしくはないでしょうとヴィオロンはローレンに返した。
「おかしいだろ、責任者が下の者に教えてもらって業務をこなすなど」

「責任者ですから、基本業務は監視ですよ。実務なんて覚える必要はありません」

「出来ないことを監視・確認なんてできるか」

理論上は仕組みを知っているし、ヴィオロンの言う意味も理解できる。だが、責任者なんて役職で、具体的な業務を知らないし、できないのは問題ではないのか。

「まず、役職をしつかり覚えていただきましょうか。他の者の前で責任者なんて言ったら、笑われてしまいますしね」

「おまえが、教えただろ」

数分前に「貴方は責任者としてお仕事をさせていただきます」と言った者が、その言葉を否定し笑う。当然ローレンは納得がいかなくて、抗議の声を上げた。

「分かりやすく言いすぎました。大変申し訳ありません」

素直に言われた通りの言葉を覚え発言する主に椅子を引くと目の前のテーブルに手帳を差し出した。少し古ぼけた手帳には手書きの組織図が書かれてある。ヴィオロンが書いたのだろうかとローレンは思いながら、引かれた椅子に浅く腰かけると説明が開始される。
まずは図の一番上とその次に連なる円（組織図であれば人、または

役職である）を指さしてヴィオロンは言った。下位の位置に幾つもの円があることから、『責任者』という立場を説明するつもりなのだろう。

「ローレン様はステュワードもしくはバトラーと呼ばれる執事職の仕事をさせていただきます。ほとんどは私が致しますので、本務は何もしていただく必要はありません」

「そのステュワードとバトラーとはなんだ」

円の内部には、今ヴィオロンが言った『ハウス・ステュワード』と『バトラー』と記載されているが、ローレンの理解できる言語ではなかったため読めず、ヴィオロンが話した言葉を繰り返す。

「ポーランでは皆様『執事』と呼んでおられますし、区別されている屋敷は少ないと思われるので、ローレン様も聞きなれない言葉だと思います。」

ステュワードは主人のかわりに屋敷の財産の管理を行います。フットマンやメイドなど使用人を雇用・解雇も自由です。領土の境界を管理し、土地を貸し与え、賃借料を徴収します。賃借の結果トラブルとなった場合鎮圧させる必要がありますが、グラデーターミル様は管理する領地はありませんので、この作業は不要でしょう。財産管理を一任されていますので、資金を何に使うのか、何に使われたのか、どれだけ不足なのかを確認・使用許可を行います。主人が不在の場合次に権限を持つのがステュワードです。グラデーターミル様が奥様と共に、屋敷を留守にされた場合は、すべての権限がステュワードに委譲されるわけです。

バトラーは、主に施設管理を行います。施設とは、屋敷・庭・馬舎・食事・人材を指します。ステュワードが屋敷の外を管理するかわりに、バトラーは内部をすべて管理するわけです。屋敷の維持はフットマンやメイドに任せます、庭は庭師に、馬舎と馬は馬番に、食事はシェフに、人材は、女性の部分をハウスキーパーに任せています。食卓に出る食器の管理と添えるワインだけは、他者に任す事は許されません。ステュワードが居ない屋敷では、バトラーが両方

を兼務します。あとヴァレットの居ない屋敷では、そのかわりもするはずですね」

「フットマンとヴァレットとは」

「フットマンとは、メイドの男性職ですよ。本来はメイドがフットマンの女性職でしたが、最近ではメイドの方が多くなってますしね、ローレン様にはこちらの方が分かりやすいかと。こちらの国ではメイドが表立つのが当たり前となっているようですね。ヴァレットは主人の身の回りのお世話をする人間ですね。洋服を選んだり、マナーを注意したり、飲み物の管理をしたり」

「飲み物とはそんなに重要なものなのか」

「人として生きるのに、一番大切です。人とは、神の血、ワインと共にあるわけですよ。他者は飲み物で主人の知性を疑うのですから、使用人は主人が恥ずかしい思いをしないために飲み物を選ぶわけです。まあ、選ぶワインで同じ料理も味が変わりますから、腕を振るったコックのために最高の組み合わせを差し出す楽しみもあります」

「ホントに文化が違うのだな」

「ええ、ワインや紅茶に大量のジャムを添えて舐めるのが当たり前だと言われた日には、国に帰りたくなりましたね」

「ジャムは大事だろ。舐めるのが嫌なら、混ぜて溶かしこめばいい」

「ジャムがおかしいですよ」

「ハウスキーパーは具体的には何をしています？女性の部分を任せるというだけ、女性なのだろうが」

「家事のすべてを決める権限を持っている女性です。後は、メイド達の責任者。という形ですか、メイド達の教育をお任せしています。相応しくない女性の報告は彼女から頂くので、こちらとは直接関わりが多いかと」

聞きたい事を確認し、分からない言葉が尽きるとローレンは表情を歪めた。

長い説明で理解できなかったわけではなかったが、思っていた以

上に複雑な使用人事情に頭が拒絶反応を起こしたのだ。

「使用人とひとくくりにしてたのだが」

「使用人になって初めて分かる序列です。ヴラディーミル様は私の国の方式がお気に召したようで、他の貴族のお屋敷はここまで明確には分かれていませんよ。それに　ローレン様は何もされなくても、対外的に恥はかせません」

ヴィオロンはこんな熱い男だっただろうかと記憶をたどる。口調そのものは昔と全く変わらないのだが、『大切にされている』という気持ちがじわじわと感じられるのが、ある意味暑苦しい。

質問をすれば返してくるし、聞けば教えてくれる、足りなければ補足し、ローレンの機嫌を損ねそうになったら距離を置く。当時は業務上必要最小限の会話と、親しくならないように接せられていた、むしろ関わり合いを拒まれていたように思う。ただ、こんなヴィオロンが本当の姿であっても悪くない気はしていた。

「ローレン様、明日からは使用人として生活していただきますので、朝は早いのですが」

「何時ぐらいに起床すれば影響がない？」

「八時にはお支度が済んでいれば問題ないと」

「それで早いのか」

「はい。では、今夜は軽くお召し上がりになって、お休みください」
そう言われて目の前に軽食を差し出されたことで、自分の空腹を思い出す。

「よく知ってたな」

「お顔の色でなんとなく」

王子のせいで夕餉を逃してしまっていたが、食べるもののなく、また、少ししか食べなくても平気という生活に慣れてしまったため、あえて食事の話はしていなかった。何も話していないのに「なんとなく」事情を察してしまうのは付き人として素晴らしいスキルなのだと思う。改めてヴィオロンを評価し、かなり遅い夕餉を胃の中心に落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3851w/>

子連れステュワードの縁由

2011年10月8日03時26分発行